

ISSN 2186-4284

**Recueil d'études sur  
l'*Encyclopédie* et les Lumières**

『百科全書』・啓蒙研究論集

N° 1

mars 2012

Société d'études sur l'*Encyclopédie*

『百科全書』研究会

## 略号

### SIGLES ET ABBREVIATIONS

- DPV Diderot, Denis, *Œuvres complètes*, éditées par Herbert Diekmann, Jacques Proust, Jean Varloot & al., Hermann, 1975 et suiv. 34 vol. prévus.
- Enc.* *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres*, Paris, Briasson, David, Le Breton, Durand, 1751-1765, 17 vol. in-fol.
- RDE *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, Paris, Aux Amateurs de livres.
- SVEC *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, Oxford, The Voltaire Foundation.

Le numéro des tomes est indiqué en chiffres romains, la ou les pages en chiffres arabes

## 『百科全書』地理項目の典拠を求めて ——ディドロによる四つの事典の利用——

小関 武史

### はじめに

『百科全書』において、地理は最大の項目数を誇る学問分野である。試みに、シカゴ大学が提供している ARTFL Encyclopédie Project のサイトで分類符号 *Géographie* を含む項目（単なる *Géographie* だけでなく、*Géographie moderne* なども含む）を検索すると、14547 件がヒットする。初期段階においては、分類符号を伴わない項目も相当数に達するので、地理項目の総数は 16000 を超えると推測される<sup>1)</sup>。『百科全書』の本体 17 巻の項目総数が約 72000 であるから、20%以上を地理項目が占めていることになる。もともと、大半は埋め草のごとき小項目であり、5 行を超えることは稀である。

世界各地の地名を見出し語とするそれらの項目は、初期においてはディドロが編集者の立場で書いている。それでは、自分でもあまりよく知りもしない地名について、ディドロはどのような経路で情報を得たのであろうか。18 世紀半ばに利用可能だった文献を利用したにちがいないが、具体的にはどれだろうか。

調査の結果、初期段階でディドロが参照したことが確実な文献が、少なくとも四つ見つかった。それらはいずれも事典であり、大量の地名を見出し語として収録している。ディドロはそれらの項目を、ときにそのまま写し、ときに要領よくまとめている。しかし、ほとんどの場合、典拠を明示せずに済ませている。

---

<sup>1)</sup> 『百科全書』序論において、ダランベールは分類符号の使用原則について、次のように記している。「通常の場合、私たちは項目の主題を示す語句の後に、当該項目が属する学問の名称を置いた。[……] 項目中で学問の名称が省略されるようなことがあっても、その項目がどの学問と関わっているかを知るには、一読すれば十分であろう。たとえば、《爆弾》という項目が軍事技術に属することや、ある都市や国の名前が地理に属することを示すのを忘れたとしても、私たちは読者の知性を信用しているので、彼らがこうした省略に衝撃を受けることはなかろうと期待している」(*Enc.*, I, xviii.)。

四つの事典は、いずれも版を重ねている。版の異同を調査し、『百科全書』本文と照合すれば、ディドロがどの版を利用したかを特定することができる。原則として、利用されたのは、項目執筆時における最新版である。こうした文献学的調査によって、ディドロが『百科全書』編集者として「情報のアップデート」に意識的であったことが分かる。

本稿では、最初に『百科全書』の地理項目の全体的特徴を概観する。次に、初期段階でディドロが執筆した項目に対象を限定し、テキストの比較照合によって典拠の特定を行う。こうした分析を通じて、ディドロが複数の事典を駆使して、『百科全書』にできるだけ多くの項目を載せようとしていた実態が明らかになるだろう。最後に、その他の地理項目の典拠を解明する道筋を示したい。

### 1. 三群に分けられる『百科全書』の地理項目

『百科全書』全 17 巻を通して、地理項目は執筆者符号によって三つの項目群に分けられる。ディドロを示す星印を見出し語に伴う項目、無署名項目、そして末尾にジョクールを表す記号を有する項目である。それらは渾然と入り乱れているのではなく、『百科全書』の刊行に即した交替を示しており、その境界もかなり明確である。

初期段階では、地理項目は編集者ディドロの担当だった。序論の直後に置かれたはしがき *Avertissement* では、ディドロの分担について次のように記されている。「末尾に文字がない項目および語頭に星印のある項目は、ディドロ氏のものである。前者は『百科全書』の著者の一人としてのディドロ氏に帰属する項目であり、後者は編集者として埋めた項目である」(*Enc.*, I, xlvi.)。わずか数行の地理項目は、まさにここで言及されたような編集者管轄項目である。若干の例外を除いて、ディドロは見出し語に星印を添えることを忘れない。

ところが、ある段階から地理項目の見出し語から星印が消え、無署名へと移行する。シュワップはディドロの関与と星印つき項目の問題を論じるに際して、「第 2 巻の 272 ページ以降、ディドロは地理に関わる小項目に星印をつけなくなっている」と述べている<sup>2)</sup>。シュワップは「272 ページ」と記してい

---

<sup>2)</sup> Schwab, Richard N., *Inventory of Diderot's Encyclopédie*, t. 1, in SVEC, N° 80, Institut et Musée Voltaire, Genève, 1971, p. 44.

るが、実際の境界線は別のところに複数存在する。すなわち、第2巻258ページのBINASCOを皮切りに無署名項目が目に見えて増加し始め、266ページの\*BISTOWから星印つきが盛り返し、278ページのBLANCKENBERG以降になると本格的に無署名が支配的となるのである。

ここから先しばらくは、地理項目は無署名で安定する。次の変化は、第6巻で訪れる。すでにその少し前から散発的に出現していたジョクール署名の項目が、371ページのFAENZAを境に、一挙に前面に躍り出るのである。このことは、アルファベット順の配列において、Fの文字から地理項目の担当者が切り替わったことを示している。その後は大半をジョクール執筆の項目が占め、無署名項目は散発的に（しかし登場するときはある程度まとまって）差し挟まれるにすぎない。

このように、地理項目は三つのグループに分けられる。第二の無署名項目群については、ディドロが自身の項目に星印をつけなかった結果として、第一の項目群とは別の見え方をしているにすぎないと思われるが、その論証は別の機会に譲る。本稿では、その予備的考察として、第一の星印つき項目群に焦点を絞り、ディドロが四つの事典を自在に駆使した実態を解明する。

## 2. ヴォジヤン『携帯地理事典』1749年版

ディドロが『百科全書』第1巻の地理項目を執筆するに当たり、第一に依拠した文献は、フランソワ＝レオポルド・ヴォジヤンの『携帯地理事典』だった<sup>3)</sup>。

この小事典は、英国で出版されたローラン・エシャールの仏訳という体裁を取っている。使用したのは第13版だと称する念の入れようだが、実際にはブリュザン・ド・ラ・マルティニエールの『地理大事典』を簡略化したものである<sup>4)</sup>。

著者の同定は難しい。タイトルページには「ヴォクルールの司教座聖堂参事会員ヴォジヤン氏による」という文言によって著者名が明記されているが、

<sup>3)</sup> Vosgien, François-Léopold, *Dictionnaire géographique portatif*, Paris, Didot, 1749, 1 vol. in-8°.

<sup>4)</sup> 1749年の改訂版では、「ラ・マルティニエールの事典に掲載されていない項目には星印を付した」(Vosgien, *op. cit.*, p. x.)と明記されているが、そのような項目はそれほど多くない。ヴォジヤンの事典がラ・マルティニエールの枠組みの上に成立している証左である。

これはジャン＝バティスト・ラヴォカ Jean-Baptiste Ladvocat の偽名であると見なされていた<sup>5)</sup>。しかしその一方で、フランス国立図書館のカタログ室 (Salle X) に配架されている『蔵書総目録 (著者順)』第 85 巻には、「ケラールによって、誤ってラヴォカ作とされた」と手書きで書き込まれている<sup>6)</sup>。この情報は電子カタログには引き継がれていないので、鵜呑みにすることはできない。カタログ室の現役司書に尋ねたところ、この書き込みがいつ、誰によって、何に基づいてになされたものかは不明だという。しかし、何の根拠もなくこうした書き込みを行うとは考えられないとのことであった。現時点では、『携帯地理事典』の筆者をラヴォカともヴォジヤンとも決しがたいが、本稿ではフランス国立図書館の匿名司書の調査を信じて、ヴォジヤンの著作であると見なしておく<sup>7)</sup>。

『携帯地理事典』の初版は、1747 年にディド書店より刊行された。八折の 1 巻本で、本文は 493 ページから成る (ページ番号は付されていない)。最終ページには、印刷をル・ブルトンが行った旨が明記されている。ル・ブルトンは『百科全書』事業の中核にいた出版業者なので、項目執筆者にこの書物を提供することは十分にありえた。

翌 1748 年、デン・ハーグで海賊版が出版される。ページ数は初版と同じであり、収録されている項目にも差異が見られない。

---

<sup>5)</sup> こうした見解は、多くの書誌や事典で表明されている。たとえば、ケラールは『文学的フランス』第 4 巻において、ミショーの『人名事典』を引き合いに出しつつ、「ラヴォカはこの事典をパリ近郊のバニユーで執筆し、ローラン・エシャールの英語から訳したことにして、ヴォジヤンの名前で出版した」と記している (Quérard, *La France littéraire ou dictionnaire bibliographique des savants historiens et gens de lettres de la France*, Paris, F. Didot, t. 4, 1830, p. 386.)。また、グラントの『フランス文学事典 18 世紀編』も、ラヴォカを『携帯地理事典』の作者として紹介している (*Dictionnaire des lettres françaises : Le XVIII<sup>e</sup> siècle*, Édition revue et mise à jour sous la direction de François Moureau, Paris, Fayard, 1995, p. 659-660.)。

<sup>6)</sup> *Catalogue général des livres imprimés de la Bibliothèque nationale : Auteurs*, t. 85, p. 685。また、これに呼応するように、同『蔵書総目録』第 215 巻では、同じ筆跡の文字がフランソワ＝レオポルド・ヴォジヤンを筆者として追加している (*Ibid.*, t. 215, p. 307.)。

<sup>7)</sup> マリー・レカ＝ツィオミスも同じ見解に立っている。*Écrire l'Encyclopédie* の参考文献では、この書目の筆者をヴォジヤンとして掲げている (Leca-Tsiomis, Marie, *Écrire l'Encyclopédie. Diderot : de l'usage des dictionnaires à la grammaire philosophique*, Oxford, Voltaire Foundation, p. 504.)。

正規の改訂版は、1749年にディドロ書店より刊行された。1巻本であることに変わりはないが、ページ数は596に増強されている。「新版へのはしがき」によると、初版は好評を博した一方で、都市間の距離や緯度経度といった数字に関して、間違いの指摘が数多く寄せられたという。新版では記述の訂正が図られる一方で、いくつかの項目が追加された<sup>8)</sup>。先に注記したラ・マルティニエール未収録の項目に星印を付すという工夫も、この版に始まる。この1749年版が、『百科全書』第1巻刊行時（1751年）における最新版であった。

それでは、ディドロはいずれの版を参照して、地理項目を執筆したのだろうか。海賊版は初版と内容が同一なので、考慮に入れる必要はない。『携帯地理事典』の1747年版、同1749年版、そして『百科全書』の三者を比較すれば、ディドロの典拠が判明するだろう。注目すべきは、1749年版において追加された項目および内容に変化のあった項目である。それぞれの例を一つずつ取り上げ、表にして掲げる<sup>9)</sup>。

Vosgien 1747	Vosgien 1749	<i>Encyclopédie</i>
該当項目存在せず	<u>A</u> , <i>Agnio</i> , ri. de Fr. qui prend sa source dans le h. Boulonnois, sépare la Flandre <u>d'avec</u> la Picardie, & se jette dans l'Oc. <del>un peu</del> au-dessous de Gravelines. Il y a 3 ri.	* <u>AA</u> , s.—f. riviere de France, qui prend sa source dans le haut Boulonnois, sépare la Flandre <u>de</u> la Picardie, & se jette dans l'Océan au-dessous de Gravelines.

<sup>8)</sup> Vosgien, *op. cit.*, p. ix-x.

<sup>9)</sup> 取消線を引いた部分は、ヴォジヤンにあって『百科全書』にない語句、あるいはその逆である。ヴォジヤンの二つの版に共通して見られるものの、『百科全書』では省略されている語句にも取消線を引いた。下線を引いた語句は、ヴォジヤンと『百科全書』とで表現が異なる箇所である。携帯型のヴォジヤンでは、一冊に多くの情報を詰め込むために、略語が頻繁に使用されている。『百科全書』ではそうした配慮が必要ないため、略語は通常の綴りに戻される。そのような語句は、両事典の差異として認定していない。イタリック等の字体の違いも無視した。各項目の末尾には、所収ページ番号を添えてある。さらに『百科全書』の項目については、見出し語とページ番号だけでは弁別が困難な場合があるので、シュワップの目録番号も記した。

	de ce nom dans <u>les</u> Pays-Bas, 3 en Suisse, & 5 en Westphalie. (p. 1a.)	Il y a trois rivieres de ce nom dans <u>le</u> Pays bas, trois en Suisse, & cinq en Westphalie. (I, 6a, Schwab 30)
Abach, <i>Abacum</i> , pet. ville d'Al. dans la b. Baviere. <del>Il y a des sources d'eaux minérales fort salutaires.</del> <u>C'est la patrie de l'Emp. Henri II. surnommé le St.</u> <del>Elle est sur le Danube, à 2 li. S. O. de Ratisbonne, 9 N. de Landszhut. lon. 29. 40. lat. 48. 52. (p. 1a.)</del>	<i>ABACH, Abacum</i> , pet. ville d'Al. dans la b. Baviere. <del>Il y a des sources d'eaux minérales fort salutaires.</del> <u>Plusieurs Auteurs pensent que c'est l'anc. Chât. d'Abaude, <i>Abudiacum</i>, où nâquit l'emp. Henri II. surnommé le St.</u> <del>Elle est sur le Danube, à 2 li. S. O. de Ratisbonne, 12 N. de Landszhut. lon. 29. 40. lat. 48. 52. (p. 1a.)</del>	*ABACH, s. petite ville d'Allemagne dans la basse Baviere, <u>que quelques Auteurs donnent pour le château d'Abaude.</u> <i>Long. 29. 40. lat. 48. 52.</i> (I, 6b, Schwab 44)

一見して明らかのように、『百科全書』の項目\*AAは、『携帯地理事典』1749年版の項目Aの丸写しと言ってよい。これに対応する項目は、1747年版には存在しない。

もう一つの項目についてはどうだろうか。ここではAbaudeという城への言及の有無が、版本特定の鍵となる。『百科全書』の項目\*ABACHで触れているこの城は、ヴォジヤンの1747年版には見当たらず、1749年の改訂版で初めて言及されている。

紙数の関係でこれ以上は紹介できないが、この他にも同様の事例は枚挙にいとまがない。『百科全書』に取り込まれたのは、ヴォジヤンの1749年版であって、1747年版ではない。

もっとも、類似を指摘しただけでは、『携帯地理事典』1749年版が真の典拠であることを論証したことにならない。間に別の文献が介在した可能性を排除できないからである。この疑問に対しては、『携帯地理事典』1749年版と『百科全書』第1巻の出版間隔がせいぜい二年と短いことと、前者に収録



された最初の 100 項目のうち、実に 94 項目が後者に取り入れられていることの二点を指摘しておこう。省略された 6 項目には、イニシャルのみが大文字で記されているという共通点がある。省略の仕方にも一貫性が認められるのであり、ディドロがヴォジヤンの 1749 年版を直接参照し、系統的に利用していたことは確実である。

ここでディドロによるヴォジヤンの利用の仕方を、文体のレベルで分析してみよう。上述のように、『百科全書』の項目\*AA は、『携帯地理事典』1749 年版の項目 A をほぼ丸写しにしたものである。語句の訂正は最小限にとどまり、構文にも手が加えられていない。一方の\*ABACH をヴォジヤンの記述と比べると、鉱泉の存在や神聖ローマ皇帝ハインリヒ 2 世の生誕といった付随的な挿話が削除され、最小限必要な記述に縮小されていることが分かる。ここでディドロが行っている操作は、「削除と転写」である。文体を改変している唯一の箇所は **Baviere** に続く関係節だが、これは切り抜いた箇所を縫い綴じるための処置でしかない。他の項目でも事情は同じである。ディドロはヴォジヤンの文体を基本的に踏襲しつつ、不必要と判断した箇所を切り落としているのである。

ディドロによる『携帯地理事典』の利用は、その意味で機械的であった。ディドロは地理項目を準備する過程でヴォジヤンを便利な書物であると認め、網羅的に取り込むことに決めていたのである。

しかし、ディドロによる地理項目がことごとくヴォジヤンに依拠しているわけではない。『百科全書』にはヴォジヤン 1749 年版に収録されていない地理項目も相当数存在する。かくして、別典拠の存在が浮上する。

### 3. 『トレヴー事典』1743 年版

ディドロが依拠した第二の文献は、『トレヴー事典』である<sup>10)</sup>。このイエズス会の総合事典は、改訂を重ねるにつれ、百科事典的色彩を強めてきた。地理項目は 1752 年版で大幅に増強されることになるが<sup>11)</sup>、1743 年版においてもすでに多くの項目が収録されている。『百科全書』第 1 巻を準備していたディドロにとって、参照しえた最新版は 1743 年版である。

<sup>10)</sup> *Dictionnaire universel françois et latin*, Paris, Veuve Delaune, 1743, 6 vol. in-fol.

<sup>11)</sup> 『百科全書』第 1 巻は『トレヴー事典』の同じ範囲を上回る数の地理項目を収録している。『トレヴー事典』1752 年版が地理項目を増強したのは、『百科全書』への対抗措置という意味合いもあったのではなかろうか。

ヴォジヤンの『携帯地理事典』がディドロにとって重要な典拠であったことを確認した以上、『トレヴー事典』と『百科全書』の二者のみを比較したのでは不十分であろう。一定の範囲を分析対象として設定し、三つの事典を横断する形で照合してみよう。試みに、『百科全書』第1巻に収録された地理項目を先頭から順に50個抜き出すと、6ページの\*Aから31ページの\*ABOERAまでが該当する。

これら50個の項目のうち、『携帯地理事典』1749年版に対応項目を見出しうるものは、約半分の26である。これに対して、23項目が『トレヴー事典』1743年版と一致する<sup>12)</sup>。『トレヴー事典』がヴォジヤンとともにディドロの重要な典拠となっていたことが、数字の上で確認できる。

利用された項目の数では、『携帯地理事典』と『トレヴー事典』はほぼ互角である。しかし、これをもってただちに両者が典拠として同等の重みを持っていたと結論づけることはできない。なぜなら、利用されなかった項目の数の違いが認められるからである。

上述のように、『携帯地理事典』の収録項目は、ほとんどすべてが『百科全書』に取り込まれている。先頭から\*ABOERAまでの範囲に限ると、ヴォジヤンには28の項目が存在するが、『百科全書』に写されなかったのは *Abcour* と *Ablis* の二つだけである。いずれも見出し語のイニシャル以外は小文字であり、ヴォジヤンにおいても扱いは軽い。『百科全書』に対応項目が存在しないのは、その反映であろう。

これに対して、『トレヴー事典』にはこの範囲に31の地理項目が存在する (*ABOERA* という項目は存在しないので、*ABNAQUIS*, *ISE* まで)。そのうち23が『百科全書』に取り込まれているが、8項目は除外されている。除外項目の内訳は以下の通りである。

まず、ヴォジヤンに対応する見出し語が認められない項目が、2個存在する。このうち『トレヴー事典』にとっての最初の地理項目である *AA* については、『百科全書』にも該当する項目が見受けられない。「いくつかの小さな川の名前である」という冒頭の一文が示しているように、これは複数の地名をまとめて記述した項目である<sup>13)</sup>。個別の川については、それぞれ別途項目が立てられており、それゆえディドロはこれを除外したと考えられる。もう

---

<sup>12)</sup> 残りの一つは後述の\**ABIENS* であり、典拠を特定できない。

<sup>13)</sup> *Dictionnaire universel françois et latin*, 1743, t. I, colonne 6.

一つの項目 ABIENS については、『百科全書』に同名項目\*ABIENS が存在するが、両者の内容は微妙にずれている<sup>14)</sup>。

次に、『百科全書』とヴォジヤンの両方に対応項目を見出しうる項目が 6 個存在する。AA (省略された *AA* とは別の項目で、ヴォジヤンの *A* および『百科全書』の\*AA に相当する)、AAHUS、ABASSIE、ABBEVILLE、ABYSSINIE、ABNAQUIS、ISE である。このうち、AAHUS を見出し語とする項目を三つの事典で比較してみよう。

<i>Trévoux</i> 1743	Vosgien 1749	<i>Encyclopédie</i>
AAHUS, s. <i>Aahusium</i> . Ville de l'Évêché de Munster. Ce nom vient d' <i>Aa</i> , petite rivière de Westphalie, sur laquelle cette ville est située, & de <i>Haus</i> , qui en Allemand signifie <i>maison</i> . Cette ville apparemment a commencé par quelques maisons bâties sur l' <i>Aa</i> . (I, colonne 6.)	AAHUS, <i>Aahusium</i> , pet. ville d'Al. dans le cer. de Westphalie au pays de Munster, Cap. de la cont. d'Aahus. Elle a un bon Chât. & est au N. O. de Coesfeld. lon. 24. 36. lat. 52. 10. (p. 1a.)	*AAHUS, s. petite ville d'Allemagne dans le cercle de Westphalie, capitale de la Comté d'Aahus. Long. 24. 36. lat. 52. 10. (I, 6a, Schwab 33)

三者とも同じドイツの都市を記述しているが、『トレヴー事典』の描写だけが異なっている。ディドロは二つの事典を比較し、ヴォジヤンに軍配を上げている。残りの 5 項目についても、ディドロの姿勢は一貫している。

地理項目を準備するディドロの前には、『携帯地理事典』と『トレヴー事典』という二つの文献がある。両者が独自に見出し語を立てた項目については、ディドロは漏らさず拾うことを原則とした。一方、二つの事典で重複している地名については、ディドロはヴォジヤンの記述を採用し、イエズス会の事

<sup>14)</sup> *Ibid.* colonne 32. 『百科全書』の記述の一部 (古代スキタイのこの民族がアレクサンドロス大王に服従したことなど) は、『トレヴー事典』から引かれているようにも読める。ディドロは『トレヴー事典』のこの項目に不満な点があり、独自に資料を集めて補足したのかもしれない (*Enc.*, I, 23b)。

典を退けた。つまり、ディドロはヴォジヤンの『携帯地理事典』を基軸に据え、そこにはないものを『トレヴー事典』から補ったのである。

それでは、ディドロはなぜそこまでして地理項目の充実を図ったのだろうか。一つ一つの項目は、豊かな内容を含んでいるとは言い難い。「削除と転写」がヴォジヤンに対するディドロの基本的な態度だとすると、小型事典のわずかな記述がさらに簡略化されていることになる。ならば、『百科全書』における地理項目の存在意義は、見出し語の豊富さに求めるしかない。

『百科全書』の見出し語がいかにして整備されたかという問題については、マリー・レカ＝ツィオミスによる重要な先行研究がある。彼女は IO から JOUISSANCE までを範囲として、『百科全書』と『トレヴー事典』1752年版の見出し語を比較している。その分析結果は、以下の三点にまとめられる<sup>15)</sup>。第一に、『百科全書』は見出し語のリストの基本的骨格を『トレヴー事典』をもとに構成している。第二に、『百科全書』による『トレヴー事典』の利用は限定的である。第三に、『百科全書』の見出し語の約四分の一について、『トレヴー事典』にないものが見出される。このうち、四分の一という比率は、どこを切り取るかによって異なるだろう。そうした留保はあるものの、レカ＝ツィオミスの指摘は、ほぼそのまま『百科全書』初期の地理項目にも当てはまる。地理の分野では、基本的骨格を与えているのが、『トレヴー事典』ではなくヴォジヤンの『携帯地理事典』なのである。

#### 4. モレリ『歴史大事典』1732年版

複数の事典の併用は、地名目録を充実させようとするディドロの意図の反映である。そして、ディドロは二つの事典だけでは満足しなかった。第1巻312ページの\*ALUSを皮切りに、\*AMACACHES、\*AMACORE、& AMACUREそして\*AMACUSAと、『携帯地理事典』にも『トレヴー事典』にも見当たらない項目が立て続けに出現する。第三の典拠が存在するのである。文体の点で一致の度合いが最も高いのは、モレリの『歴史大事典』であった<sup>16)</sup>。この事典は標題に「歴史」を掲げているが、地理にも力を注いでいるのである。

モレリの『歴史大事典』は1674年に初版が出て以来、『百科全書』刊行時までに20以上の増補版が出版されている。研究者によって数え方が異なるが、

---

<sup>15)</sup> Leca-Tsiomis, *op. cit.*, p. 151.

<sup>16)</sup> Moréri, Louis, *Grand dictionnaire historique*, Paris, Jacques Vincent, 1732, 6 vol. in-fol.

ここではアーノルド・ミラーによる書誌学的研究をふまえることにする<sup>17)</sup>。『携帯地理事典』と『トレヴー事典』に関しては、ディドロは項目執筆時における最新版を参照していた。モレリについても同様の仮説に基づいて版本を絞り込みたいところだが、複数の都市からさまざまな版が刊行されているため、調査の範囲を拡げる必要がある。候補となりうるのは1732年のパリ版（19版）以降であり、1733年のバーゼル版（20版）、1740年のバーゼル版（21版）、同じく1740年のアムステルダム版（22版）、1743年から1749年にかけてのパリ版（23版）が該当する。

最初に排除されるのは20版である。バーゼル版は同じ出版業者が手がけており、古い方を参照する理由はない。次に除外されるのは23版である。これは唯一の四折版であるだけでなく、所蔵する図書館が極めて少ないという点でも異色である。ミラーはゴールディングの研究に依拠しつつ、これはヴェネツィアで印刷された海賊版であろうと推定している<sup>18)</sup>。最新版とはいえ、ディドロがこの四折版に接していた可能性は極めて低い。

こうして三つの版が残る。1732年パリ版、1740年バーゼル版、1740年アムステルダム版である。ここまで絞り込んだうえで、出版者連合の会計係を務めたブリアソンが残した出納簿を確認してみよう<sup>19)</sup>。ルイ＝フィリップ・メイが活字化した記録によると、モレリへの言及は二カ所にある。一つは1746年2月11日付の記事で、当時の編集者だったグア神父に『トレヴー事典』6巻とモレリ8巻の代金が支払われている<sup>20)</sup>。次に、マレ神父に貸し出していた19点の書籍が返却された記事が見えるが、その中にモレリの7巻本が含まれている。前後の支出記事の日付から判断して、これは1748年6月のことである<sup>21)</sup>。このモレリはベールの著作集とともにディドロに送られたという注記があるので、これがディドロの典拠と考えて差し支えない。しかし、出納簿には単にモレリと記されているだけで、出版年も出版地も不明である。さらに、「7巻本」とあるのが問題を複雑にしている。上記三つの版本のうち、

<sup>17)</sup> Miller, Arnold, « Louis Moréri's *Grand dictionnaire historique* », in Kafker, Frank A., *Notable encyclopedias of the seventeenth and eighteenth centuries : nine predecessors of the Encyclopédie*, 1981, SVEC, N° 194, p. 13-52.

<sup>18)</sup> Miller, *op. cit.*, p. 24.

<sup>19)</sup> May, Louis-Philippe, « Histoire et sources de l'*Encyclopédie* d'après le registre de délibérations et de comptes des éditeurs et un mémoire inédit », in *Revue de synthèse*, 1938, N° XV, p. 7-109.

<sup>20)</sup> *Ibid.*, p. 32.

<sup>21)</sup> *Ibid.*, p. 42.

パリ版とバーゼル版は6巻本、アムステルダム版は8巻本なのである。パリ版の編集者であるグージェ神父は1735年に2巻本の『補遺』を刊行しているが、パリ版とこの『補遺』を合わせても7巻にはならない。もともと、出納簿の原本では数字の部分が一行上のIIという文字と重なっており、6と書かれている可能性も捨て切れない<sup>22)</sup>。

出納簿の記述が決め手にならないからには、やはりテキストを照合する以外に利用版本を特定する道はない。等しくモレリを名乗っている以上、基本的な骨格は三つの版に共通しているが、細部においては相互の違いが認められる。本文にもそうした違いはあるが、ここでは見出し語の綴りに注目したい。『百科全書』の地理項目の存在意義が地名目録の充実という点にあるならば、ディドロは見出し語を正確に写し取ることに注力していたはずだからである。

『百科全書』の\*AMBIBARIENS、\*ANDANAGAR、\*ANDRA *ou* ARDRAは、それぞれモレリの1732年パリ版にあるAMBIBARIENS、ANDANAGAR、ANDRA *ou* ARDRAを写したものと見なしうる。見出し語の綴りは完全に一致する。一方、バーゼル版とアムステルダム版における対応項目の見出し語は、AMBIBARRIENS (Rが一つ多い)、ANDANAGAR, ANDANAGER & AMEDANAGER (三つの表記が存在する)、ANDRA, ARDA & ARDRA (別名表記が一つ余計にある) となっており、見出し語が異なる。些細な違いではあるが、それゆえに手をかけて改変するに値しないとも言える。1732年のパリ版がディドロの典拠であると断定するにはなお不十分かもしれないが、少なくともその蓋然性は極めて高いと言える<sup>23)</sup>。

さて、この節の冒頭で記したように、ディドロは『百科全書』第1巻312ページの\*ALUS以降、モレリの『歴史大事典』を地理項目の典拠として利用し始めている。それより前にモレリが地名を見出し語として立てていなかった

---

<sup>22)</sup> 出納簿の原本の写しは、逸見龍生氏に提供していただいた。ご厚意に感謝申し上げます。

<sup>23)</sup> パリ版の編集者であるグージェ神父は、1735年に2巻本の『補遺』を、さらに1749年にはやはり2巻本の『新補遺』を手がけている(本体6巻と合わせた全10巻を1セットとしている図書館もある)。モレリとしては最後の版に当たる1759年版は、グージェ神父による二つの補遺を組み込んだ10巻本である。こうした経緯を考慮すると、少なくともパリの出版業界においては、1732年のパリ版こそモレリの正統を受け継ぐものと認識されていたのではなかろうか。

たわけではない。なぜ、この段階からモレリが使われ出したのだろうか。この点で興味深いのは、モレリと入れ替わるように、『トレヴー事典』に基づく地理項目が極端に少なくなることである。ヴォジヤンと同じ見出し語を持つ項目が取り入れられないのは従来通りとして、『トレヴー事典』独自の項目までもがほとんど切り捨てられるようになった<sup>24)</sup>。その一方で、ヴォジヤンとモレリに共通する見出し語では、ディドロは前者を優先している<sup>25)</sup>。さらに、モレリと『トレヴー事典』の両方においてヴォジヤンには欠落している項目が、モレリに即して書かれる事例も出現し始める<sup>26)</sup>。こうしたすべてのことが何を示しているかは明らかであろう。ディドロはある段階で、『歴史大事典』の地名語彙が豊富であることに気づき、ヴォジヤンの補完役を『トレヴー事典』からモレリに切り替えたのである。

## 5. サヴァリ『商業総合事典』1748年版

『百科全書』初期段階におけるディドロ執筆の地理項目には、これまで見てきたように三つの事典が典拠として利用されていた。それらは相互に排他的であり、同一項目において複数の事典に基づく記述が盛り込まれることはない。ところが、例外的に複数の事典を組み合わせて執筆された地理項目も見出される。といっても、すでに検討した三つの事典が併用されているのではなく、第四の典拠であるサヴァリの『商業総合事典』がヴォジヤンとともに活用されているのである<sup>27)</sup>。

『商業総合事典』には、1723年から1730年にかけて出た初版の3巻本、1726-32年の4巻本、1741年の3巻本、1742年の4巻本<sup>28)</sup>、1748年の3巻本

<sup>24)</sup> たとえば、『トレヴー事典』1743年版第1巻の368欄から370欄にかけて、(1) AMBION、(2) AMBLETEUSE、(3) AMBOINE、(4) AMBOINES、(5) L'archipel d'Amboine、(6) AMBOISE と六つの地理項目が出現する。このうち(2)、(3)、(6)についてはヴォジヤンに同名項目が存在し、ディドロはそれらをふまえた項目を執筆している。残りはヴォジヤンにも『百科全書』にも対応項目が見られない。

<sup>25)</sup> \*AMALFI (*Enc.*, I, 313b) 以下、多くの事例が存在する。

<sup>26)</sup> \*AMMONITE (*Enc.*, I, 365a) などがこれに該当する。

<sup>27)</sup> Savary Des Bruslons, Jacques, *Dictionnaire universel de commerce*, Paris, la Veuve Estienne et Fils, 1748, 3 vol. in-fol.

<sup>28)</sup> フランス国立図書館のカタログでは、請求記号 V-5725 (から V-5728 まで) のセットについて、その出版年を1744年と記しているが、現物の扉ページには1742年出版と記されている。

などがある。ページ付け等から判断して、1748年版は1741年版の忠実な複製と考えられる。小嶋竜寿が指摘するように、百科全書派の人々が活用したのは、この1748年版である<sup>29)</sup>。それはまた、1751年における最新版でもあった。

ディドロがヴォジヤンとサヴァリを駆使して提供する項目は、いずれも二つの段落から構成されている。第一段落が前者に基づいた手短な描写にすぎないのに対して、それより大幅に長い第二段落は後者をふまえた通商活動の記述に充てられている。項目\*ACAPULCOを例にとって、ディドロによる典拠利用の実態を見てみよう。まず、第一段落から確認する。

Vosgien 1749	<i>Encyclopédie</i>
<del>ACAPULCO, <i>Aeapuleum</i>, ville assez consid. &amp; port de l'Amér. dans le Mexique sur la mer du Sud. Le port est très commode &amp; peut contenir jusqu'à cent vaisseaux ; on s'y embarque pour le Pérou &amp; les Philippines. Elle est à 80 li. S. de Mexico. Il ne faut pas la confondre avec Aguatuleo. lon. 276. lat. 17. (p. 4b)</del>	*ACAPULCO, <del>s. m.</del> ville & Port de l'Amérique dans le Mexique sur la mer du Sud, Long. 276. lat. 17. (I, 58b)

例によって、ディドロは『携帯地理事典』の記述を「削除と転写」の原理によって圧縮している。通常であれば、『百科全書』の項目はこれで完結するところであるが、この項目に関しては21行に及ぶ第二段落が後に続く。この部分は『商業総合事典』に基づいているが、対応する原文があまりにも長いため、適宜省略して表に掲げる<sup>30)</sup>。

Savary 1748	<i>Encyclopédie</i>
Le Commerce <del>qui se fait par le Port</del>	Le commerce se fait d'Acapulco <u>au</u>

<sup>29)</sup> Kojima, Ryuji, « Aux sources de l'*Encyclopédie* : les éditions du *Dictionnaire universel de commerce* utilisées par les Encyclopédistes », in RDE, N° 45, 2010, p. 153-159.

<sup>30)</sup> 表現は同じながら、その出現箇所が異なる場合には、その語句を< >に入れた。取消線と下線の意味はこれまでの表と同じである。



d'Acapulco, ~~a trois objets~~; le Perou, les Philippines, & les Côtes les plus proches du Mexique.

~~On vient de parler de ce dernier, qui se fait tout entier par Realayo, la Trinité, Vatulco, Tecoantepeque, & quelques autres petits Havres, où <les Marchands d'Acapulco envoient leurs marchandises> sur de légers bâtimens, pour en tirer des vivres & des rafraîchissemens, quoiqu'ils en reçoivent aussi quantité du côté de la terre sur des mulets, particulièrement de la farine, du chocolat, <de petits fromages,> des chairs salées, & toutes sortes de denrées semblables, pour lesquelles il s'y tient tous les jours un marché. C'est aussi du côté de terre qu'Acapulco reçoit les bestiaux dont elle a besoin.~~

~~On a aussi traité du principal Commerce d'Acapulco au Perou, qui, comme on l'a dit, se fait tout par un seul vaisseau, lequel part tous les ans de Lima ; [...] C'est donc le Commerce <des Philippines & de l'Orient,> qui fait la plus grande richesse d'Acapulco, & qui lui donne le plus de réputation.~~

Ce Commerce néanmoins ne se soutient que par 2 seuls vaisseaux, qu'on nomme Hourques, qui sont des especes de grands gallions du port de 800 ou

Pérou, aux Isles Philippines, & sur les côtes les plus proches du Mexique. <Les marchands d'Acapulco envoient leurs marchandises> à Réalajo, à la Trinité, à Vatulco, & autres petits havres, pour en tirer des vivres & des rafraîchissemens. Il leur vient cependant du côté de la terre <des fromages,> du chocolat, de la farine, des chairs salées, & des bestiaux. Il va tous les ans d'Acapulco à Lima un vaisseau, ~~ee qui ne suffit pas pour lui donner la réputation de commeree qu'a eette ville~~; elle ne lui vient cependant que de deux seuls vaisseaux appellés hourques, qu'elle envoie <aux Philippines & à l'Orient.> Leur charge au départ d'Acapulco est composée, partie de marchandises d'Europe, qui viennent au Mexique par la Vera-cruz, & partie de marchandises de la nouvelle Espagne. La cargaison au retour est composée de tout ce que la Chine, les Indes & l'Orient, produisent de plus précieux, perles, pierreries, & or en poudre. Les habitans d'Acapulco font aussi quelque négoce d'oranges, de limons, & d'autres fruits que leur sol ne porte pas. (I, 59a)

<p>1000 tonneaux. [...] Leur charge, au départ d’Acapulco, est composée, partie de marchandises d’Europe, qui viennent au Mexique par la Vera-Cruz, &amp; partie de marchandises de la nouvelle Espagne, <del>qui les unes &amp; les autres sont envoyées à la mer du Sud sur des mulets.</del> La cargaison, au retour, est de tout ce que la Chine, les Indes Orientales, &amp; <del>le reste de l’Orient, produisent de plus riche &amp; de plus précieux, même des perles, des pierreries, &amp; de l’or en poudre, dont ces vaisseaux reviennent si chargés, qu’ordinairement la batterie d’entre deux ponts leur devient inutile;</del> [...] <del>Au dessous d’Acapulco, sur la route des Manilles, sont des petits Ports; les Sallagues, dont on a déjà parlé; &amp; la Natividad, où les <u>Marchands</u> d’Acapulco font quelque négoce d’oranges, de limons, &amp; d’autres fruits, <u>qui sont assez rares dans leur Ville,</u> [...]</del> (I, 504a-505a.)</p>	
---	--

サヴァリの『商業総合事典』は、フォリオ版のほぼ1ページを費やして、アカプルコで行われている通商の有様を非常に詳しく説明している。ディドロは半分以上の段落をばっさりと切り落とし、さらに残った部分についても無駄を大幅に圧縮して、自身の項目に取り込んでいる。こうした事例として、\*ACAPULCO の他にも\*ACADIE ou ACCADIE、\*ACARA ou ACARAI、\*AFRIQUEなどを挙げるができる。これらの項目の共通点は何であろう

か。どういう条件を整えば、ディドロはサヴァリに基づいて長めの補足を行うのであろうか。

ディドロによるサヴァリの利用は、第 1 巻冒頭の *ÉTAT GENERAL DU COMMERCE* の範囲に限られる<sup>31)</sup>。もっとも、これは『商業総合事典』1748 年版において 544 ページを占める長大なものであり、しかも参照箇所は方々に散らばっている。地理項目を補足するために、ディドロが数百ページに及ぶ概論の隅々にまで目を通したとは考えにくい。

ディドロの手引きとなったのは、『商業総合事典』の事典項目である。概論に続くアルファベット順の項目の中には、地名を見出し語とするものが含まれている。次に引く *ACAPULCO* もそうした地名項目の一つである。

*ACAPULCO. Port fameux de la nouvelle Espagne. Voyez ce qui en est dit dans l'Etat général, ci-devant page 504*<sup>32)</sup>.

説明は最小限にとどめられており、詳細については概論を参照すべきことが、ページ番号とともに記されている。この参照指示に従って 504 ページを開いた読者は、そこに何を見出すのであろうか。先に引用したアカプルコにおける通商活動に関する記述である。つまり、『商業総合事典』に内在する参照指示を辿りさえすれば、それぞれの土地における通商の記事を拾い出すことができるのである。この方法に従えば、概論を通読する手間が省けるだけではない。地域ごとにまとめられた概論の記述を『百科全書』の項目に仕立てるためには、ノートを取りながら先の巻の分まで一挙に執筆しなければならない。ところが、サヴァリの「事典の部」に収録された地名項目を手引きにすれば、自然とアルファベット順に項目を準備することができるのである<sup>33)</sup>。

『商業総合事典』の利用方法をこのように想定すれば、『百科全書』の地理項目の中に二つの段落から構成されたものが散発的に出現する理由も明らか

---

<sup>31)</sup> 初版では *COMMERCE* という項目にまとめられていた記述は、1741 年版（および 1748 年版）において巻頭を飾る概論として位置づけられた。1742 年版では再び項目 *COMMERCE* に戻り、全体的に増補されたうえで第 1 巻第 2 部に置かれている。

<sup>32)</sup> *Savary, op. cit., t. I, p. 553.*

<sup>33)</sup> こうした地名項目は、1742 年版の『商業総合事典』には存在しない。このことは、ディドロの典拠が 1742 年版ではないと考える根拠となる。

となる。それらはサヴァリが取り上げている地名なのである。

## 6. われ知らず種明かしをするディドロ

「はじめに」で記したように、ディドロは大半の地理項目において典拠を明示していない。実際、これまでに引用した項目では、いかなる文献指示も見出すことができなかった。この沈黙のゆえに、典拠特定は至難の業となる。なぜなら、ディドロの文面から典拠にさかのぼることはほぼ不可能だからである。したがって、調査はディドロが参照したかもしれない文献の見当をつけることから始まる。そしてその文献を博捜し、『百科全書』のテキストと似た記述があるかどうかを探るのである。気の遠くなるような地道な作業である。

しかし、私たち後世の研究者にとって幸運なことに、ディドロは滑稽で疑わしい記述に行き当たると、揶揄せずにはいられない性格の持ち主である。そのようなとき、ディドロは思わず典拠の著者なり標題なりを書きとめてしまうのである。

最重要典拠であるヴォジヤンの名前も、そのようにして表面に浮上する。ディドロが初めてヴォジヤンに言及するのは、項目\*AGUASにおいてである。ヴォジヤンの説明によれば、この南アメリカの部族は「インド人の中で最も理性的かつ最も開明的である」という<sup>34)</sup>。しかし、生まれたばかりの赤子の頭を二枚の板で挟みつける風習を持つ部族の、一体どこが「理性的」なのか。ディドロは表立った批判を控えている。とはいえ、理性的という判断が自分のものではないことを示すかのように、「ヴォジヤン氏の素晴らしい携帯事典が言うには」という一句を差し挟んでいる (*Enc.*, I, 191a)。

項目\*ANSICOでは、ディドロの介入はもっと明確なものとなる。ヴォジヤンは、このアフリカの王国における人肉食の実態を詳しく伝えている。当地では人肉を扱う肉屋があり、住民は両親が死ぬと同時にその肉を食らう。さらに、国王に捧げるために、毎日200人の人間を殺すという<sup>35)</sup>。ディドロは黙ってられない。『百科全書』の項目は、理性に反する記述を攻撃する戦場と化す (*Enc.*, I, 490a)。ディドロは手始めにヴォジヤンの項目から人肉食に関する部分だけを抜き出し、出典を明記する。そのうえで、要約の四倍の分

---

<sup>34)</sup> Vosgien, *op. cit.*, p. 9b.

<sup>35)</sup> *Ibid.*, p. 31ab.

量を費やして、徹底的に反論するのである。ディドロが最初に持ち出すのは、証言の信憑性である。一般的に、旅行家の証言は当てにならない。遠路はるばる出向いた先で、ありきたりの出来事しか経験しなかったとなると、格好がつかないからである。さらに、ディドロは簡単な計算を試みる。国王の食卓に日々200人分の人肉が供せられるのが本当だとすると、犠牲者の数は年に73000に及ぶ。「何という人食いであろうか！」とディドロは叫ぶ。この数字を見ただけで、ヴォジヤンの記述に誇張があることは明らかではないか……。このように、ディドロは典拠の中で何かしら愚かしい記述に遭遇すると、沈黙を破らずにはいられないのである。

その「軽率さ」のおかげで、ディドロの典拠は『百科全書』研究会が取り組んでいるメタデータ・プロジェクトの網に見事に引っ掛かる。これは何を意味するだろうか。メタデータ・プロジェクトの最重要事項は、「明示された書誌情報」である。確かに、その中には偽の典拠も数多く含まれる。しかし、重要なのは、真の典拠もまた含まれているということである。一度でも網に引っ掛かれば、それらの情報はリスト化される。すると、「典拠として利用された可能性のある文献の見当をつける」作業が、格段に楽になる。何かを検索するとき、自分で検索ワードを「考案」するのと、プルダウンメニューから「選択」するのと、どちらが簡単かを考えてみればよい。手がかりが何もない場合は、よほどの専門家でもない限り、ある文献を思いつくことすら困難である。書誌情報のデータベースは、『百科全書』の真の典拠を突き止めるための有力なツールとして機能するであろう。

### おわりに～『百科全書』地理項目の典拠の全貌を求めて

『百科全書』の地理項目は、三つのグループに分けられる。本稿では、そのうち第一の星印つき項目群について、ディドロによる四つの事典の利用法を明らかにした。典拠の優先順位は明確である。初めのうち、ディドロはヴォジヤンの『携帯地理事典』のほとんどすべての項目を写している。次に、『トレヴー事典』を用いて、ヴォジヤンが漏らした地名の穴埋めを行っている。さらに、第1巻の300ページすぎから、モレリの『歴史大事典』に頼り始める。最後に、例外的に二つの段落から構成される地名項目については、第一段落をヴォジヤンに基づいて記述した後に、第二段落でサヴァリの『商業総合事典』を活用している。このように複数の事典を自在に駆使することによって、ディドロはなるべく多くの地名目録を『百科全書』に提供しよう

と試みていたのである。それは『百科全書』全巻を貫く編集方針である。

第二の無署名項目群は、すでに示唆したように、ディドロが書いた可能性が高い。その中にはヴォジヤンをふまえて書かれたものが多く含まれており、しかもそこでは「削除と転写」の原理が認められるからである<sup>36)</sup>。こうした典拠の選択と利用法は、執筆者同定の有力な手がかりである。しかしその一方で、四つの事典のいずれにも合致しない項目が、一定数見受けられる。ディドロの典拠が四つの事典以外にもあると考えるのが妥当であろうが、現時点ではその特定に至っていない以上、ディドロとは別の匿名筆者が独自の文献をもとに地理項目を担当したという可能性を、完全には排除できない。星印つき項目群と無署名項目群をさらに詳しく分析し、両者に共通する新たな典拠を発掘しうるかどうか、今後の課題として残される。

ジョクールの手になる第三の地理項目群は、ヴォジヤンを基軸に据えているとは言い難い。さらに、『トレヴー事典』や『歴史大事典』をふまえているとも言えない。ディドロによる地理項目群とは典拠が異なるのである。一部のジョクール執筆項目は、ラ・マルティニエールの『地理大事典』を利用しているように思われる。しかし、『地理大事典』に収録されている項目のすべてが取り込まれているわけではなく、ジョクールによる取捨選択の基準を合理的に説明することができないという難点が残る。見出し語の一覧が『百科全書』第6巻以降の地理項目と近い事典的な文献が見つければ、それがジョクールの主要典拠である可能性が高い。探求は続く。

(こせき・たけし 一橋大学)

---

<sup>36)</sup> BUDE *ou* OFFEN (*Enc.*, II, 458b-459a) および CACHEMIRE (*Enc.*, II, 503b-504a) では、項目筆者がヴォジヤンの名前を明示している。

本誌に掲載された論文は、査読委員会による査読を経たものです。

本誌は日本学術振興会による科学研究費補助金を受けて出版するものです。  
ここに厚く御礼申し上げます。

『百科全書』・啓蒙研究論集 第1号

発行日	2012年3月31日
編集・発行	『百科全書』研究会
連絡先	180-0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町 4-24-24 鷺見 洋一
印刷	株式会社 インフォテック 206-0033 東京都多摩市落合 2-6-1 電話 042-311-3355